

【山形新聞 2025年6月14日】

県外企業と連携しマガキ養殖

鶴岡市の加茂水産高（小山和彦校長）の生徒が、同市加茂でマガキ養殖の実証事業に取り組んでいる。県外の関連企業と連携したプロジェクトで、5月には海中に千個の「種苗（幼生）」を設置。生育時の海洋データを解析しながら新たな漁業の可能性を探る。

マガキの生育状況を確認する生徒たち＝鶴岡市・加茂港



加茂水産高が挑戦中

本県では夏の味覚としてイワガキが知られている一方、冬に荒れる日本海側の環境などを背景に、マガキの養殖は難しいとされてきたという。同校は養殖の知見を持つ企業「リブル」（徳島県）とつながりを持ち、昨年度に養殖の実証を始めた。

所は加茂レインボービーチに加え、県漁業協同組合の許可を得て加茂港内を増やした。沖合に近い港内は餌となるプランクトンが多いという。

12日には3年生3人が、リブルのスマート養殖推進事業室長の岡田翔太郎さん（34）の助言を受けて生育状況を確認した。籠一つ当たりのマガキの重さは当初60㌔だったが、ビーチ内で300㌔、港内で500㌔に増量した。今後は生育環境を整えるために大きさごと

海中に種苗1000個設置 丹念にデータを解析

に細長い1㍑ほどの籠を使用。人工的に生み出した種苗を中に入れ、海中に沈めて育てる。欧米やオーストラリアで採用されている方法で、ノウハウを持つリブルは年中の出荷を可能にしている。

昨年度は夏の海水温の影響などを受けたため、9割ほどが死滅した。本年度は種苗を入れる時期を夏から5月に早めたほか、設置場

に選別し、籠を入れ替える作業などを実施する。

現在では1個当たり約1㌔で、一般的には6カ月から1年で出荷に適した50㌔前後に成長する。専用機器で日々の塩分濃度や海水温などのデータを蓄積。成長との関係进行分析し、養殖が可能かを見定める。伊藤笑太郎さん（18）は「加茂でうまくいけば、他地域にも広げることができる。小まめに調査し、モデルをつくりたい」と話していた。

（相原健佑）

「キジフル」に
Aー編集動画